

第1章 戦場

戦と餓えの戦場

ガダルカナルからの帰還

星繁太郎さんのお話から

○ガダルカナル島 表紙裏地図

○召集 人を軍に呼び集めること。

○制空権 航空機によって、空中を支配する力。
○制海権 海軍の艦船によって海上を支配する力。

私は、昭和十七年（一九四二年）五月に召集され、旭川にあった陸軍第七師団第二十八連隊に入隊しました。二十七才のときで、二度目の召集でした。

私のいた隊は、ガダルカナル島作戦に参加することになり、九月二十一日にはガダルカナル島へ上陸しました。その前に上陸した日本軍約一千人は、二万人の米軍を相手にほとんどが全滅してしまいました。ガダルカナル島は激戦地です。

かろうじて上陸してからは、携帯食糧が少なかったため、ずっと飢えに悩まされました。制空権と制海権を米軍にうばわれていたために補給が受けられず、生えている野草をゆでて食べたり、ヤマイチゴを採って食べたりするなどして空腹をしのぎました。何も食べなければ消化器が弱って死んでしまうと思ひ、草という草はほとんど食べました。しかし、アサガオのつるだけはのどを通らなかつたのを覚えています。

そういう中、味方が上陸してきて、米などの補給を受けたことがありました。私は、体がおとろえ、胃腸が弱っているところにかたいご飯を食べたら、胃が破れてしまうと思ひました。それで、おもゆやおかゆにして食べました。若い仲間の一人はかたいご飯が食べたいと言って食べたところ、苦しんで苦しんで二日目になくなつてしまいました。

ガダルカナル島の海岸線にはヤシの木がたくさん生えていてます。一本の木に十個くらいのヤシの実がなっています。今、こうして生きのびることができたのは、これらのヤシの実から水分をとったり、熟した実を食べることができたからだと思ひます。

○駆逐艦 海軍艦船の一種。小型で速力が速い。警戒・護衛・奇襲攻撃を行う。

○巡洋艦 軍艦の一種。戦艦より小さいが航続力がある。

○戦艦 大型で攻撃力も防御力も大きい軍艦。

○大本営 戦時に天皇のもとに置かれた、軍の最高の指揮・統率機関。

○ブーゲンビル島 表紙裏地図

○野戦病院 戦場の後方につくり、負傷者や病人を治療する病院。

○衛生兵 軍隊の中で、医療に関する役目を行う。

この海岸線にいたときに、米軍の駆逐艦や巡洋艦など、十一隻から一斉射撃を受けたことがあります。私たちは海の中に逃げ、波にさらわれまいように必死に木につかまっています。敵の顔が見えるくらいの距離だったため、砲弾が青白く光りながらすぐ目の前をヒュツ、ヒュツと通り過ぎていきました。顔に熱を感じるほどでした。もしこの時、反対の山側に逃げていたら、まともに砲撃を受けて死んでいたと思います。こういう中に四か月以上もいたわけです。翌十八年二月七日に大本営からの命令で、ようやくガダルカナル島からしりぞき、ブーゲンビル島に移りました。そこでの私のつとめは、医療機器も薬も無い名前だけの野戦病院で、衛生兵の手伝いをするのでした。手伝いといってもおもな役目は埋葬です。仲間が次々と飢えによる栄養失調などで死んでいった



イメージ図

島に上陸するアメリカ軍

○将校 位が少尉以上の軍人。

軍隊において、戦闘の指揮をする士官。少尉以上の武官。

○ガダルカナル島の戦い 太平洋戦争の激戦地で、展開した日本軍部隊の多くが補給路を絶たれ、多数の餓死者を出したことから、餓島（がとう）とも呼ばれた。

一九四二年（昭和十七）、日本軍が上陸し飛行場の建設を開始するがアメリカ軍がこれを占領。以後、日本軍とアメリカ軍との間で島内及び近海での激戦が展開された。

一九四三年（昭和十八）、二月日本軍が撤退。日本軍の死者は約二万人と言われる。

○マニラ 表紙裏地図

○台湾 表紙裏地図

め、穴を掘っては七、八人の死体を埋め、土をかけ、簡単な墓を立てるのが仕事でした。

五月頃に日本への送還命令が出て、フィリピンのマニラ、台湾を経由して広島へ到着、病院列車という片側にたたみがしいてある列車に乗って、一人で旭川に帰ってきました。旭川に着いて自分の部隊に帰ると、仲間からは幽霊じゃないかと驚かれました。軍隊では、ガダルカナル島からもどった私の話を聞くために、将校たちが集まるので、変な話をされては困ると、隊からひきはなされることとなり、一週間ほどで家に帰されることになりました。

故郷の浦臼町からは五人が召集されていました。しかし、私以外は戦死か行方不明で帰ってきていま



イメージ図

島に上陸する日本軍

せん。自分だけが生きて帰るのはかつこう悪いと思い、家には何も連絡せずに帰りました。ちょうど浦臼の秋祭りをやっている九月十五日でした。家に帰ると母親は何も言わず、ただただ泣いて喜んでいました。

私が帰ってきたことはすぐに町中に知れわたりました。戦死した仲間の家族が現地の戦いの様子などを聞きにきました。しかし、これが一番辛かったです。飢え死にしたり、病気になるって亡くなったりしていました。遺族にはとても本当のことは言えません。立派に戦い戦をしたのだらうと思っっているのに、実はこうだったということは一言も言えません。切ない思いをするのは遺族より私でした。遺族の期待通り「立派な最期でしたよ。」と言うしかなかったのです。

戦地で死んだ者は、遺体を焼くことができなかつたため、遺骨などは持ち帰ることができません。現地の石ころを遺骨箱に入れて持ち帰り、遺族に渡していました。ガダルカナルでは本当に多くの方が亡くなりましたが、遺骨が帰ってきた人など一人もいませんでした。

今になって振り返ると、戦争は何のため、誰のために行われたのかと疑問に思います。多くの国民が犠牲になったことに強いいきどおりを感じます。だから今の子どもたちには、戦争を英雄化して伝えてはならないと強く思っています。

DATA

平成20年度西区平和事業

聴き取り

- ・平成20年7月17日
- ・西区役所



星繁太郎(ほし・しげたろう)さん

- ・大正3年(1914年)生まれ
- ・札幌市西区在住